

「近代カナダの歩み」

北島 霞

カナダという国は、日本人には分りにくい国である。たとえばトロントからモントリオールまでの素晴らしいハイウェイを走ってみる。オンタリオ州からケベック州に入ると道路標識が突然英語からフランス語に変わって、そのことを知っている人も、少なからず面くらう。これが一つの国ののだろうか？

やはり同じハイウェイで、「車のスピードは空から監視されている」という注意標識に気づくだろう。ハイウェイ・パトロールでは追いつかず、ヘリコプター・パトロールでなければならぬ広さなのである。

また、たとえば米国との国境に近い町（これという町はほとんど全て国境に近いのだが）に行ってみる。町のたたずまいは米国と同じようなものである。しかもテレビのブラウン管には米国の放送局の番組とコマーションがばっちり映り、カナダのものよりよく見られている場合もあるという。だとすると、カナダ人と米国人が会ったとき、おたがいは一体どこで相手が米国人であり、カナダ人であることを見分けるのだろうか？

このようなテーマ——つまり言語政策、人口が少ない割に国土が広大なことから生じる諸問題、米国との関係の問題は、それぞれ一つずつを取り上げても、何冊もの本が必要となるほど重要なものであり、簡単には論じ尽せるものではない。ほかにも連邦と州の権限、外国資本への依存など、重要なテーマはいくらでもある。

これらの問題を、全てでないにせよ、手際よく、読者に分かり易くまとめたのが、最近カナダ大使館から刊行されたジ

ョン・セイウエル・ヨーク大学教授の「近代カナダの歩み」(原題は「カナダ、過去と現在」)である。カナダは最近まで一般の日本人には、なじみが薄い方に属する国だったが、最近では経済、資源面でのつながりという公の関係だけでなく、冬のスキー、夏の魚釣り、避暑など、レジャーを通じてカナダを知る人がふえつつある。「きれいな国だ」「とっても気持ちいい国だ」という単なる印象を超えて、もう少しカナダを知りたいが、分厚い研究書はどうも——という人から、学生、一般人までのカナダ入門書としての役割を、この本が果たすのは確かだろう。

全部で八十ページというこの小冊子の構成をみると、ほぼ半分が歴史に当てられている。カナダの複雑な歴史を簡潔にまとめるのは、おそらく骨の折れることだったと思われるが、逆にコンパクトにまとめられているために、欧州列強の利



害の対立がどのようにして北アメリカに持ち込まれ、カナダという国家が誕生する条件を作ったか、カナダにおける英仏の抗争がどのようにして米国の革命を助けたか、同じような連邦制なのに、何故カナダと米国とは違うのか、といった点が無理なく頭に入るわけでもある。これは余聞だが、今年の三月、カナダ

政府がソ連大使館員をスパイ活動に従事したとして国外退去を求めたことがあった。このとき活躍したのは、カナダの連邦警察である騎馬警察隊であったが、いわばFBI(米連邦捜査局)に当たる捜査当局の名が、カナダではなぜ「騎馬警察」なのか。それはだだっ広いノースウエスト・テリトリーズの法と秩序を守るため、一八七三年に実際に馬に乗って仕事する警官隊が作られたためと分かれば、なるほどとうなずけるわけで、そのこともこの小冊子から理解できるのである。

もうひとつ、この本の特色は、写真、絵画から漫画までをたっぶり取り入れ、視覚的な効果をねらった点である。それは、一章から七章までの本記とは別に、「絵でみるエッセイ」として「ニュー・フランスの征服」など四項目が扱われている。小冊子が陥りやすい単調さ、無味乾燥さ、記述の少なさを補っている。とくに政治漫画の利用はセイウエル教授の得意とするところのようであり、ジョン・リックカー教授との共著「いかにして、我々は統治されているか」(邦訳「カナダの政治」、ミネルヴァ書房)でも、有効に利用されていた。この小冊子では「絵でみるエッセイ、風刺漫画家のみたカナダの政治史」としてまとめて取り上げられており、これをみれば何ページを費やした説明よりはるかによく、そのころの政治情勢が理解できるわけである。おそらくこれはセイウエル教授が象牙の塔にこもるタイプの学者ではなく、放送の解説者、ジャーナリストとして幅広く活躍している、その経験の中から生れてきたものだろう。

また「文化的対立」の章でケベック問題が詳しく取り上げられていることも、特徴のひとつである。一九七六年十一月のケベック州選挙の結果まで取り入れられて分析されている材料の新鮮さも見逃せない。

というわけで、この小冊子は非常によくできた本であるが、ひとつだけ日本の読者として不満を述べさせてもらおうなら、日本との関係に触れたところがほとんどない点である。これだけ読めば、大体カナダのことが分かる、という性格を持つ本であり、とくに日本向けに作られたものではない以上、これはやむを得ないことかもしれない。

しかし、セイウエル教授は、トルドー首相の「連邦主義とフランス系カナダ人」という著書の序文を書き、トルドー首相の連邦主義を支持する姿勢を示している。そのトルドー首相は日本人記者団が七六年十月東京からカナダに招かれ、オタワで記者会見したとき、カナダはロッキーマウンテンを距てて、とかくヨーロッパに向きがちな東部カナダと、アジアに利害関係の深い太平洋カナダを調和させねば、国としての存立の価値がないのだという趣旨のことを熱っぽく説いていた。太平洋カナダはとくに日本と関係が深いわけだが、その太平洋カナダにこの小冊子が余り詳しくふれていないのは、日本との関係を別にしても物足りない感じが残るわけである。(毎日新聞外信部副部長)

「近代カナダの歩み」をご希望の方には、無料で郵送しますので、当広報部にハガキでご請求下さい。